

大黒屋光太夫をとりまく人々① 石川忠房

ここでは、大黒屋光太夫に関わった様々な人たちを取り上げ、ご紹介していきたいと思います。
今回は、日露会談で日本側の代表を務め、光太夫の帰国に大きく関わった石川忠房を取り上げます。

石川忠房(1753?~1836)は、旗本伊丹勝典の次男に生まれ、旗本の石川家の養子となりました。明和 9(1772)年に家督を継ぎ、寛政 3(1791)年には、旗本や御家人を監視する目付という役職に任命されました。

寛政 4(1792)年、ラクスマンが大黒屋光太夫を連れて蝦夷地に来航したという報せが松前藩から幕府に届きます。幕府は、忠房に「宣諭使」という役名を与えて、幕府の代表として松前へ赴くように命じました。この宣諭使というのは、長崎以外で交易はしないという日本の決まりをロシア側に理解させ、穏便に帰国させるという役目から、「宜しくロシアを諭す」という意味をこめて名づけられたのだと思います。また、この時、忠房は六右衛門という通称を将監と改めています。

松前に着いた忠房は、根室に滞在していたラクスマンたちを呼び寄せ、松前で日露会談を開きました。これは、日本とロシアのはじめての外交交渉だったという点でもとても重要な出来事でした。この会談で、忠房は、ラクスマンたちに日本の国法を諭し、それを理解させることに成功しました。そして、ラクスマンたちに長崎への入港許可証を渡し、交易については長崎で交渉するように伝えました。また、光太夫と磯吉の身柄についても、この会談中に日本側が引き取りました。このように、忠房は、江戸幕府が描いたシナリオ通りの交渉を着実にこなした有能な役人でした。

その後の忠房は、大阪城番、勘定奉行などの要職を歴任しました。そして、10年後の寛政 13年には、勘定奉行を兼任しながら、蝦夷地御用掛を命じられ、再び蝦夷地に渡りました。そして、蝦夷地の経営に大きく関わることになります。また、安中宿の助郷を軽くしたことで人々から慕われ生神として祭られたという逸話が残っていたり、和歌に秀でて多くの和歌を残したりと、「実直な官僚」以外の一面も窺うことができる人物です。現在展示中の「蝦夷乱届書」には、忠房が日露会談のときの詠草集が収められています。その中から一首をご紹介します。

異国の 船ふきおくれ 日本の たみを恵みの 天津神かぜ (ラクスマンが帰国した時に詠んだ歌)

編集後記

特別展で展示する資料を借用するのに函館と札幌に出向きました。函館では、作業の合間に日露会談が行われた松前町へ展示パネル用の写真を撮りに行くことを計画したのですが、調べてみると函館から松前は3時間近くかかることがわかりました。ラクスマンたちが陸路で往復した距離なので、もっと近いのかと思っていましたが、実際はとても遠いのです。ついでに立ち寄れる距離ではないので、大人しく函館から札幌へ向かいました。そして、2時間ほど経ち、そろそろ車窓の景色に飽きてきた頃、眼前に大きな海が広がりはじめました。ラクスマンたちが、室蘭の絵鞆を経由して上陸しようとしていた砂原という港がある町です。ラクスマンたちは、ここから陸路で松前まで行く予定でした。江戸時代には、砂原から陸路で松前に入るというのは、割とメジャーなコースだったようですが、予想以上の長距離です。昔の人の健脚と北海道の大きさを改めて感じた出張になりました。

今回の特別展では、北海道からお借りしてきた資料を多数展示しています。普段はご覧になる機会が少ない資料ばかりだと思いますので、是非じっくりご覧になっていただければと思います。

大黒屋光太夫 記念館だより



特集 開館1周年記念展(第2回特別展)

「帰ってきた 光太夫~ラクスマンの来航と日露会談~」

☆連載 光太夫をとりまく人々① ★記念館ニュース ☆編集後記

発行: 鈴鹿市

問合先: 大黒屋光太夫記念館

三重県鈴鹿市若松中一丁目1-8

059-385-3797 (Fax 兼用)

ホームページ <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/kodayu/>

開館 1 周年記念展（第 2 回特別展）**帰ってきた 光太夫～ラクスマンの来航と日露会談～**

今回の展示では、光太夫やラクスマンを描いた絵画も多く出陳していますが、それよりも和本がたくさん陳列されています。でも、難しい字で書いてあって、ちょっと難しいかもしれません。ここでは、展示している主な資料の現代語訳を掲載します。一緒に光太夫の帰国から日露会談までをたどってみましょう。（資料の読み下し文や詳しい内容は図録に掲載しておりますので、ご希望の方は受付にお申し出ください。）

第1章 光太夫、帰国する

光太夫は、ラクスマンに連れられて日本に帰国します。最初に着いたのは、北海道の東側にあるバラサンというところでした。光太夫たちは、そこから根室へ移動します。そのときの様子は、以下の通りです。

9月3日午後2時頃、バラサン沖に大船が現れました。帆を降ろして停留していて、どこの船か分かりません。人を派遣して様子を探らせようとしたところ、その大船が大砲を放ったので、みな恐れて誰も行くとするものがないなくなってしまうました。午後4時頃、その船から小船が出てきて、バラサンへ上陸しました。ロシア人に間違いありませんでした。翌4日 10 時頃、その船から 12 人が上陸しました。その中に、伊勢国白子村の者で、天明3年に漂流し、ロシアへ漂着したという船頭・光太夫がいました。光太夫と磯吉と小市の3人がロシアの船に送ってもらって帰ってきたというのでした。「船を繋留できる入り江があれば移動したい」と聞かれたので、「この先に子モロ(根室)という入り江がある」と教えました。（「奇談秋乃月」より）

根室番人・駒蔵が申し上げます。9月3日午後4時過ぎに根室から15kmほど沖合にロシア船を発見しました。最初、日本の船が難船したのかと思い、助け船を出したところ、その船が大砲を2度放ったので、近くまで行くことが出来ませんでした。そのため根室に戻り、運上屋で翌朝まで待機しました。すると、翌5日未明にロシア船が根室にやってきました。すぐに光太夫とロシア人の水主数人が、犬一匹を連れ、鉄砲を持って上陸してきました。光太夫が「先々お久しく御座候」と挨拶しました。

アイヌの人たちは、妻子引き連れて山へ逃げてしまい、戻ってきても鉄砲を恐れ、ロシア人には近付きません。ロシア人は、水を汲みに度々上陸します。ロシア船には乗り込んだことがないので、船中の様子はわかりません。運上屋の隣では、アイヌ人に手伝いをさせてロシア人の宿舎を作っています。ロシア人は、島にヒツジという毛の生えた動物を放し飼いにしており、根室の陸から白く見えております。（「光太夫一件其他」より）

第2章 松前へ 江戸へ 急使が走る

ロシアの船がやってきたという知らせは、すぐに根室から松前藩へ届けられ、そして松前藩から江戸幕府へと報告されました。慌ただしい緊迫した様子が次の資料から伝わってきます。

10月6日、東蝦夷地のアツケン場所の熊谷富太郎から早飛脚が松前へ着いた。ロシアの船が根室に着いたことを知らせてきたのだ。ロシア人は、日本人漂流民を連れており、日本の大王へ直々に対面して書状を手渡したいということだ。それを熊谷富太郎が差し止め、来年四月頃までは根室で松前藩と幕府の指示を待つという。この知らせを聞いて、殿様(松前志摩守道広)も大いに驚いてお騒ぎになり、幕府へ知らせるために松前弥蔵と南条郡平の2人を急いで江戸へ登らせた。2人は、仙台で参府途中の若様(松前章広)に追い付き、この件をお知らせしたところ、家老の松前左膳を先に登らせるよう仰せになった。そのため、家老と弥蔵が先に江戸へ登り、幕府にこのことを奏上した。幕府では、このロシア船来航を重大事件とし、幕府の役人を多数松前へ派遣し、近国へも加勢を命じられた。(これは、「ロシアは近国を侵略している大国で、日本の近くへも時々その軍船が来ている。そういう類か、それとも日本の様子を探りに来たのかかわからない。日本人を送ってきたのだから、粗末な扱いをすれば後々恐ろしいことにもなりかねず、用心したほうがよい。」と蘭学者たちが申し出たからだ。)若様は、江戸で家督相続を済ませ、「若狭守」という官位も頂いて、すぐさま松前へ戻るよう命じられた。（「魯西亜船入津一件」より）

第3章 箱館、そして松前へ

松前藩からの報告を受けた幕府は、松前藩の城下町でラクスマンたちと会見することにしました。幕府の代表として目付の石川将監と村上大学が派遣されることになりました。また、根室で冬を越したラクスマンたちは、幕府の求めに応じて松前へ移動することになりました。

幕府の役人が根室に来て、「日本人漂流人を送り届ける為に遠方から来られたことは大儀千万である。また、日本王へ願いもあるということ事だが、江戸は遠いので、松前でその願いを申すように。」と言い渡しました。そして、松前藩の禎祥丸という船に数人のロシア人を乗せ、松前まで行くつもりだと言いましたが、ラクスマンは自分たちの船で全員が松前に行くことを主張しました。それで、禎祥丸が先導して砂原という湊まで行き、そこから陸路で松前に向かうことになりました。しかし、5月下旬に禎祥丸は佐原に着いたのですが、ロシアの船は着きませんでした。海上の霧が濃く、ロシア船を見失ってしまったそうです。役人達は非常に驚き、心配して探したところ、6月8日になってロシア船が箱館港へ入港したので、皆安心しました。そして、ラクスマンたちは、この箱館から松前へ向かうことになったので、佐原でロシア船の到着を待っていた役人達も箱館にやってきました。松前からの迎えの者や荷物持ちなどを合計すると七百人にもなりました。6月17日箱館出立し、泉沢、尻内、福島に泊まって、20日に大沢で松前よりの警護の者と合流し、その日の午後に松前に到着しました。（「異国ヲロシア人來朝記」より）

第4章 日露会談

日本とロシアの会談は、総勢 1000 人近い南部藩・津軽藩・松前藩の兵士が警護する中で行われました。ラクスマンたちは、日本と国交を樹立したいと日本側に告げましたが、日本は長崎以外では応じられないと主張し、長崎への入港許可書をラクスマンに与えることにしました。また、この会談で、光太夫たちの身柄は、日本へ引き渡されることになりました。

6月22日に行われた最初の会談では、宣諭使(石川将監)は烏帽子・直垂という格好で、その後は烏帽子・狩衣だった。会談では、最初に日本側が、「理由が無く来航した異国船は、事と次第によっては厳しく処分するところだが、今回は日本人を助けて来航したということなので、その次第を申し述べなさい。」と言ったので、光太夫を送ってきた事情をロシア人が述べた。その後、「日本には厳しい掟があるので、その内容を理解するように」と言って、宣諭使の石川将監が日本の国法をロシア人に読み聞かせた。ロシアの通訳は、それを受けて「宿舎に戻ってよく相談したい」と申し出たので、その日の会談はそれで終了した。24日には、2回目の会談が開かれ、前回の内容の請書を差し出すように言われた。その際に、光太夫たち日本人を無事に引き渡すという話になり、旅宿で引渡しが行われた。

第5章 蝦夷地へ駆けつけた人々

ラクスマンの来航の知らせは、日本人にとっても衝撃的でした。様々な人が、ロシアという国に対して恐怖や不安、そして興味を抱きました。松前を警護する兵士として蝦夷地へ渡った人もいれば、ロシアの情報を入手するため松前や根室へ駆けつけた人もいました。

大黒屋光太夫記念館ニュース

☆夏休み向け企画展「知っておどろき 大黒屋光太夫」が終了しました。

今回の展示では、夏休みの自由研究のために親子で来館してくださる方も多くいらっしゃいました。多くの方に利用していただける施設になるよう、これからも色々な企画をしていきたいと思います。

★「知っておどろき 大黒屋光太夫」の展示で、期間限定で映画「おろしや国酔夢譚」で使用されたエカテリーナ 2 世と大黒屋光太夫の衣装を展示しました。これからも折を見て展示していきたいと思っています。



「知っておどろき 大黒屋光太夫」の展示風景